調査報告

華北農村調査の記録
―2019年8月河北省農村―

河野　正

Ⅰ　調査概況

本報告は2019年8月に河北省唐山市でおこなった聞き取り調査の記録である。筆者による唐山市周辺での農村調査は6度目となり，これまでの調査報告は年ごとに調査報告の形で発表している[1]。開始当初と比べ，この数年は日中関係や中国国内の状況のために調査対象を絞らざるを得ない状況が続いている。そのため本年度は調査地域が1村となった。また，村内でも当初数名からの聞き取りを予定していたのだが，数人が急遽都合が悪くなり，結局のところ1名からしか聞き取りをおこなうことができなかった。

しかしながら今回聞き取りをした人物やその内容は，中華人民共和国時期の人の移動という点で大変興味深い。これは昨年の調査でも課題としながら十分聞き取ることができなかった内容である。

また，今回聞き取りをおこなった地域も特殊なところだったので，記しておきたい。以下の聞き取り内容でも触れられているが，本村は鉄鉱山に囲まれた地域であり，1980年代から本格的に鉱山が開発されている。そもそも本村が位置する唐山市自体が鉄鋼業を一大産業としており，本地域などの鉄鉱石がその原料として使用されている。そのため現在本村では農業をおこなう人はおらず，エゴも鉱山の「家属院」という団地で生活している。今回聞き取りを行ったのもそのエゴの自宅であることも付記しておきたい。

本報告ではプライバシー保護のため，人名・地名はアルファベット表記としてある。地名は県までは実名を表記し，村名をアルファベットにしてある。例えば「十里店村」であれば「S村」，人名は例えば「毛沢東」なら「MZD」と表記する。

II　聞き取り内容

河北省唐山市遷安県 X 鎮 X 村

LGM

2019 年 8 月 9 日午前

インフォーマント年齢：72 歳　子年

エゴおよびその家族について

- 本村の人ではなく昌黎県生まれ。もともと「非農戸」で，農業はしていなかった。
- 祖父・父はもともと本村より 20 里ほど離れた村出身で，遷安県人。父は昌黎県城の商店で働いており，エゴはその間に昌黎県で生まれた。
- 1955 年，父が本村で仕事をすることになったため，本村に来た。
- 父は糧庫（食糧倉庫）で会計として働いた。ここで働くことになった経緯は，上述 20 里離れた出身地の人が本村で幹部をしており，その人が紹介してくれたため。
- 父の糧庫での給料は現金で支給された。農民は労働点数が支給。
- エゴは本村へ来た当初，学校に通っていた。初級中学まで通ったが，「三年困難」時期の後，1962 年に行かなくなった。
- エゴの家は本来「非農戸」だったが，「三年困難」時期以降，戸籍を都市戸籍から農村戸籍へ変更して農業を始めた。
- 戸籍を変更して農民になった理由は，「三年困難」時期に食べるものがなく，農民になれば自留地をもらえるため。「生きるため」に農民になった。人民公社解体（エゴの記憶によれば 1982 年末から 1983 年始め）まで農業をした。父親は引き続き糧庫で働いており，依然として都市戸籍だった。
- エゴの階級成分は中農とされた。「非農戸」のエゴ一家が中農にされたのは，父の出身地に土地が残されていたためである。この土地では祖父母など親族が農業をしていた。
- そのため，土地改革の時点で中農と定められたが，そもそも昌黎県におり，また「非農戸」だったため特に意味はなかった。しかし，遷安に戻ってきてから意味を持つようになった。
- 土地改革の時，エゴは 17 人家族で 13 ムーの土地を所有していた。このため中農になった。しかし土地はやはり足りなかったので，土地改革では 7 ムー分配され合計 20 ムーになった。
- 祖父は民国時期に警察官で，派出所の所長をしていたことがあった。1920 年代のこと。

その後，家で農業をしていた。

- エゴたちは父の仕事の関係で本村に来たため，もともと本村には縁もゆかりもなく，知り合いもいなかった。
- そのため 1962 年に本村で農村戸籍を取得するまでは「よそ者」という感覚があった。
- エゴたちのように，「よそ者」として村にいた人達は，エゴたちを含めて 3 戸いた。そのうち 1 戸は出ていったが，2 戸は戸籍を得て村に永住した。これを中国語では「落戸」と言う。
- とは言え，戸籍を得る前と後では，村民との関係や待遇などに変化はない。戸籍を得る前から関係は十分良いものだった。即ち，戸籍を得たことで生じた変化は，自留地を得たことだけである。
- 農民も含めて，村には外地出身の人たちがいた。しかし農業集団化時期には農民は現地の戸籍を持たないと土地を利用できなかったため，農民は必然的にすぐ「落戸」した。
- 父は 16 歳の時に出身村を出てまず山海関の商店で働いた。それから昌黎県に行った。
- これらの出稼ぎは，どちらも「幇」があった。つまり，地縁や血縁がある人が先に現地に行き，ある程度成功しており，それらの人が後から人を呼んだ。
- エゴは 1969 年，22 歳の時に結婚した。相手は 2 里ほど離れた H 村の人。村落の拡大により，本村と H 村は現在では一続きになっている。
- 妻と知り合ったのは，近所の人が紹介してくれたから。H 村から本村へ結婚してやってくる人は多い。H 村以外でも大抵が近隣の村から。遠くの村から来る人は少ない。

鉄鉱山について

- 本村周辺には鉄鉱山があるが，ここが開発され始めたのは 1980 年代以降。唐山鋼鉄が開発した。本格的に開発されたのは 90 年代以降。鉱山が開発されて村は大きく変わった。
- 鉄鉱山では地元の人が多く働くが，外地の人もいる。本村で農業をする人はもういない。
- 鉱山ができて，以前は盛んに採掘がされたが，今はそれほどでもない。以前は比較的自由に採掘ができていたが，今は管理が強まり，計画分しか採掘できないため。また，現在の埋蔵量もあまり多くなくなった。
- 大躍進運動で土法高炉をやった際にも，周囲の鉱山の鉄鉱石を利用した。
- 集団化時期，集団の副業としてこの鉱山の利用も考えられたが，結局実行できず，実行できないままに唐山鋼鉄による開発が始まった。

おわりに―考察に代えて―

調査概要でも触れた通り，本年度は調査地域が限られており，また聞き取り対象の人数も少ないものであった。

冒頭でも述べたように，本地域は鉄鉱山を有するという特殊な環境下に存在していた。そのため最近 30 年に限れば，比較的特殊な歴史過程を歩んでいると言える。他方で，改革開放以前の状況を考えると，大躍進運動下の土法高炉ではこれらの鉱山の鉄鉱石を使用した例は見られたが，鉱山を活用した副業などは整備されず，他地域と同様の状況に置かれていた。これについては，他地域との比較の中で改めて考察する意義があるだろう。

また，本年度は意図せずして，昨年十分に聞き取りできなかった「人の移動」に関する情報を聞き取ることができた。このテーマについては近いうちに，他の史料などと合わせて研究成果としてまとめたい。これらも含めて，今後，様々な状況が好転することを祈りたい。

注

［1］ 拙稿「華北農村調査の記録―2014 年 9 月，2015 年 8 月河北省農村」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』第 2 号，2016 年，180～197 頁，拙稿「華北農村調査の記録―2016 年 8 月河北省・山東省農村」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』第 3 号，2017 年，233～251 頁および拙稿「華北農村調査の記録―2017 年 8 月河北省農村」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』第 4 号，2018 年，205～213 頁，拙稿「華北農村調査の記録―2018 年 8 月河北省農村」『学習院大学国際センター研究年報』第 5 号，2019 年，100～110 頁参照。

付記　本研究は JSPS 科研費 JP19K20516，JP19H01315 の助成を受けたものである。

（こうの　ただし　　東京大学社会科学研究所助教）